緑爽会会報　No. 188

2023年10月25日発行
日本山岳会　緑爽会
発行人　荒井正人

デザイン・制作　関塚貞亨

〜〜《報告》〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

9 月山行報告　思い思いの大菩薩峠

石塚 嘉一

実施日：10 月 3 日（火）　　参加者：10 名（後掲写真参照）

「2000 メートルの稜線から南アルプスの山々や富士山の展望を楽しもう」と会報で、どこかのツアーのコピーのような呼びかけをして、恒例の秋の山行に大菩薩峠を回る募集をしたら、だいたいいつもの顔ぶれがそろった。

大菩薩と言えば、登山を本格的に再開した 30 年前は、中央本線で塩山に出て裂石から上日川峠に上がらなければならなかったので、大菩薩峠に登って、帰りはだいたい千石茶屋のあたりで暗くなって、タクシーを呼んで塩山まで戻ったことも何度かあった。

今では甲斐大和駅からバスがあり、わずか 40 分ほどで上日川峠の登山口に着いてしまう。そこから、昔と変わらず、1 時間半たらずで 2000 メートル近い大菩薩峠に立つことができるのだから、緑爽会のメンバーには手頃なハイキングコースである。

今回は、上日川峠から福ちゃん荘を経て大菩薩峠に上がり雷岩から唐松尾根を下って一周する計画である。

大菩薩は 30 数年ぶりだという田村さんと栗城さんに、初めての横関さん、何度も大菩薩に登っている荒井さんでも、このコースはなんと大学生のときに登って以来 49 年ぶりだとあとで教えてくれた。私は支部の古道調査があって、今年 3 回目の大菩薩なので、いろんな思いを持って登るメンバーの組み合わせでおもしろいなと思った。

目　次

ページ

《報告》
1. 9 月山行報告　大菩薩峠　　石塚嘉一
3. 大菩薩峠、再び　　田村佐喜子
3. 初めての大菩薩峠　　横関邦子
4. 30 数年ぶりの大菩薩峠　　栗城幸二

《寄稿・投稿》
5. 小島烏水生誕 150 年に想う　　小原茂延
6. 山岳会設立の頃（20 世紀初頭の東京）❻　　南川金一

《ようこそルームへ》
7. 山歩きが好きだった棟方志功　　松本恒廣
7. 終戦前後の東京そして昭和後半の津軽　　小原茂延

《予告など》
7. 講演会、山行案内
編集後記・次号予告

ロッジ長兵衛のわきの登山口から、林道の上にある緩い登りの山道を行く。30 分ほどで福ちゃん荘に着いて、休憩。ここから雷岩に出る唐松尾根への道を分けて、大菩薩峠を目指す。すぐに、富士見山荘（廃業）に。期待を裏切らず、富士山が（かろうじて）黒く見えた。初めての大菩薩のときは、ここから見えた雪をかぶった富士山が、北斎の描いた富士のように大きかったのに驚いたこ

とを覚えている。山荘の前に「富士見平」の標識があって、ここから旧道（旧青梅街道）を登れば賽の河原近くに上がれる。

我々は富士見山荘から沢の方に下ってすぐに勝縁荘（休業）に出る。中里介山はここによく泊まって『大菩薩峠』を書いていたと、以前、泊まった時にここの主人が話してくれた。（深田久弥の『日本百名山』の「大菩薩岳」の中にも勝縁荘が出てくる。）その横から、ちょっときつい登りの、本格的に山道らしい道が始まる。

この日の朝早く松本を出て参加されたメンバー中、最高齢の田村さんは、この登りになっても先頭を行く私のあとについて遅れずに歩かれるのに、みんな安心したり驚いたり。それでも、あと少しで介山荘の下に出るところで、ベンチに腰を下ろして小休止。またすぐに歩きだして、やがて介山荘が上に見えて、「大菩薩峠一八九七米」の大きな標識の前に出た。

向こうには、募集のときの文句の通り、南アルプスの山々―そうそうたる甲斐駒、北岳、間ノ岳など―が豪華に並んでいるのが、少しかすんだなかで見られて、みなさん、感嘆の声をあげしばし写真を撮るのに余念がない。甲斐駒と北岳の形が美しい。富士山は見えなかった。

（左より）大島洋子、荒井正人、中村好至惠、田村佐喜子、鳥橋祥子
横関邦子、石塚嘉一、富澤克禮、栗城幸二、小林敏博

峠までは晴れて汗ばんだ登り道も、峠の上ではさすがに寒く感じる。南アルプスを眺めながら、昼食を早々にすませた。記念写真のあと、唯一、コース上で心配した岩場のある急登を登り出した。

ここも心配は杞憂に終わり、岩登りのようなこともしながらも無事登り切った。

介山荘の周りは、防鹿柵の中だけが草が生い茂っていて、8月に来たときはヤナギランの花も見られたが、柵の外は何も草がない。登山口で、珍しいフクオウソウの花を見つけて、これは幸先よいなと思っていたら、そのあとは何もこれという草花がなかった、鹿のせいだと、富澤さんが嘆いていた。（フクオウソウは、多くの府県で希少種や絶滅危惧種に指定されている。）それでも親不知ノ頭から賽の河原に下るところで、リンドウの花を見つけてほっとした。

大した遅れもなく雷岩に着いて、険しくて急な唐松尾根を下る前の、長めの休憩をして、展望を楽しんだ。先頭を小林さんに交代して下り始める。（大菩薩嶺は、はじめから計画に入れず、今回は割愛）やがて、ゆるい下りになって、黄金色になるにはあと少しの落葉松の中を、帰りのバスの時間を気にしながらどんどんスピードをあげているようだ。

そんな中でも、中村さんは時々立ち止まり、樹間から見える大菩薩峠や周りの山を眺めたり、紅葉したツタウルシをいち早く見つけて教えてくれたり、さすがに山の画家らしい。

無事、福ちゃん荘脇に下り着いた。そこから、林道を行くグループと別れて、大多数はもと来た山道を下って、ほとんど同時に上日川峠のバス停にもどった。ほぼ計画通りの時間で歩けた山行であった。万一の場合は大菩薩峠から、元来た道を戻るエスケープもシミュレーションしていた荒井さんは、みなさんのさすがの健脚に、驚いたり喜んだりであった。（写真/石塚嘉一、中村好至惠）

行程：甲斐大和駅発 9：50⇒（バス）⇒10：30 上日川峠 10：40→福ちゃん荘（唐松尾根分岐）11：20→富士見山荘→勝縁荘→12：20 介山荘・大菩薩峠 12：50→賽の河原→13：45 雷岩 13：55→福ちゃん荘 15：05→15：30 上日川峠 15:45 ⇒（バス）⇒16：30 甲斐大和駅

大菩薩峠、再び

田村 佐喜子

松本から朝の車窓を楽しみながら甲斐大和駅に着くと、もう東京からの方々が待っていてくださった。

バスで上日川峠まで行き、同行の方々に迷惑のかからぬようにと、心して歩き始める。車道は歩きやすく、周囲の木々の紅葉にも気を取られ､晴れた空､風景を楽しみながら歩く。車道から山道に入ると、再びここへ来ることが出来たという想いが込み上げて来て、峠に向かう一歩一歩が大事に思われた。標高 1897 メートルの大菩薩峠到着。昼食も手早くすませて、記念写真を撮っていただく。

雷岩までの明るくひらけた尾根道はガレ場も急登もあるが、広い展望に恵まれ、雲海に南アルプスが浮かび、幾度か登った甲斐駒ヶ岳が見えているではないか。また、下にはダム湖までもが見え、思わず歓声を上げてしまう。リンドウの濃い紫の色までもが目にしみる。

雷岩からの急坂の登り下りも、慎重にガレ場を越え、歩き易くなると唐松尾根も、もう終わり、福ちゃん荘へ着く。ここからは車道を選び、少し話などしながら、峠のバス停まで無事到着する。満員のバスに乗り合わせて甲斐大和駅へと向かう。名残惜しい旅の終わりである。

ともに歩いてくださった皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

初めての大菩薩峠

横関 邦子

いつまで猛暑続くのかと我慢の夏がやっと過ぎたかと思われる 10 月 3 日、上日川峠から大菩薩峠を通過する周回コースの山行に参加した。この峠の名前から、古い歴史のあるところと思い込んでいたが、まさに素敵な百名山らしい山だった。ウェブには初心者でも行かれる 2000mの山とあったが、それだけではなかった。

1960 年代の古い「大菩薩峠」という時代劇映画が先に私の記憶に入っていたためか、大菩薩峠という名前には映画を見たわけでもないのに古道的で、古寺のあるところというイメージがあった。実際には、山の斜面は緑の笹が一面に絨毯のように生え、上を見上げると緑の木々の間から木漏れ

日がきれいな、歩きやすい山道から始まる百名山の 1 座に登る山道があった。バスを降り、「ロッジ長兵衛」から、「福ちゃん荘」、「介山荘」とほぼ登りの道を歩き、大菩薩峠が近くなると木々はなくなり、砂利や石のガレ道となった。遠く南アルプスが連なって見える大菩薩峠の良さそうな岩に腰をかけ、いい景色だなあと山々を眺めながら昼食。歩いている間は暑くて汗をかいたが、この日は座っていると風が冷たく、やっぱり 2000m に近いからか、やっと夏も過ぎたのかと感じた。

食事後、雷岩(2040m)を目指して、ガレ道を歩き、一歩一歩足の置き場所を選びながら岩の道を登った。登ることに集中する時間が楽しい。雷岩からの景色はちょっと雲がでてきたが、広く遠くまで見渡せた。

雷岩から唐松尾根を下る道では、岩や石がゴツゴツ、ゴロゴロで足元ばかり見ていたが、毎年 10 月半ばからは紅葉がきれいとか。よく見るとツタウルシなどの紅葉の早い葉が赤く色づいていた。

全員コースタイムでスタート地点の「ロッジ長兵衛」に戻り、バスで帰途に就いた。山道をうねうね走るバスの中で、満足、安心してウトウト。大菩薩嶺(2057m)までは行かなかったが、かの有名な山を１つ体験できた。ありがとうございました。

30 数年ぶりの大菩薩峠

栗城 幸二

久々の会山行。張り切って待ち合わせの甲斐大和駅に行く。素晴らしい天気になった。

10 時前のバスに乗り全員そろって出発する。バスは曲がった山道を、息を切らせながら小一時間ほど登り、無事に登山口の「上日川峠」に着いた。

スタートからなだらかな道を登り、正午過ぎ青空に映えた「介山荘」が稜線上に見えて来ると、この日の登りはほとんど終わった感じだ。

大菩薩峠は何十年ぶりだろうか。30 数年ぶりの二度目と思っていたが、見えた景色は自分のおぼつかない記憶の中にある映像とは全く違うものに思えた。

景色を見ながら考えていると、一番の違いはこの大展望の中に「ダム」が否が応でも入ってくることだった。この景観の中で恐ろしいほどの違和感だ。どうしてこの様な高い稜線直下にダムなんて存在するのだろうか。不思議だ。

「大菩薩峠」といえば、やはり中里介山の小説が先ず思い浮かぶのは年齢だろうか。主人公の剣客、机竜之助の「音無しの構え」は子供心にも恐ろしいものだった。もちろんこの大長編は子供が読む本でも無かったし、未だ読んでもいないが遠い記憶に残っていた。峠にこの銅像か何かの片鱗でも無いかと思って見渡したが、全くそのようなものは目には入らなかった。

ここで集合写真を撮って出発。雷岩までの主稜線上はさすがに素晴らしい展望が広がった。雲の上に南アルプスの連なりがある。甲斐駒・白根の山々～塩見・荒川・赤石・聖まで霞んではいるが雲上に浮かんでいた。茅ヶ岳が眼下に佇み、更に北方向には八ヶ岳が続く。

雷岩からは唐松尾根を下り、3 時半前には順調にバス停へ。以前は裂石からのルートがメインだったと教えてもらった。やはりこの大菩薩は再訪だと思うが、山も変わり自分の受け入れ方も変わり、見る景色もまた違って見えたのだと思う。

今度は錦秋の秋にでも、落ち葉を踏みしめながら歩いてみたいものだ。

今回計画実行していただいた石塚さん小林さん、楽しい山行をありがとうございました。

～～《寄稿/投稿》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

小島烏水生誕 150 年に想う

小原 茂延

今年は小島久太烏水の生誕 150 年に当たる節目の年といえるが、本部発刊の会報「山」にもこれといった記事が現在(9 月中旬)のところ無いことに奇異な感じを受ける。顕彰碑を設け烏水祭を主催している四国支部は「烏水祭のお知らせ」に生誕 150 年を掲げていたが、イベントに取り入れたような情報は寡聞にして聴かない。

烏水の近年における記念展としては 2007 年 1 月～4 月にかけて横浜美術館で開催された「小島烏水　版画コレクション展」が記憶にある。といっても実際の展示には足を運んだわけでなく、日本山岳会が協力した関係で資料映像委員会の先輩から聞いたり、図録からその内容を知ったのであるが、その経緯を横浜美術館学芸グループ長(当時)の沼田英子女史が思い出の展覧会の一篇として書かれている。烏水の生涯について、山だけでなく全体像を捉えているので引用させて頂くと、「小島烏水(1873～1948)は、横浜正金銀行の行員として定年まで働きつつ、登山家、随筆家、版画研究家、コレクターとして活躍した多彩な人物である。現在ではその名を知る人は少ないが、14 巻からなる『小島烏水全集』を紐解くと、槍ヶ岳初登頂(筆者注：近代登山家として)や日本山岳会の創立(同注：発起人)、『日本アルプス』をはじめとする山岳文学の執筆、浮世絵の研究や西洋版画の収集など、一人の勤め人が成し遂げたとは思えない仕事の幅広さと量に圧倒されるだろう。」と、その巨人ぶりを見事に活写されている。

横浜美術館は 1990～2000 年代初頭にご遺族から二回ほど作品、資料併せて 1000 点余の収集・寄贈を受けて版画・水彩画・書簡のコレクションを有することになったという。この事は最近緑爽会に入られた烏水のお孫さんである相良泰子さんから状況を伝え聞いている。

その後の展覧会としては 2017 年に世田谷文学館で「山の日記念」に合わせて「山へ！展」の開催があり、小島烏水、深田久弥、田部井淳子らと共に日本の山岳界における多大な貢献者として展示コーナーが設けられた。この内覧会には相良さんも招待されており、JAC 本部からは神長幹雄・永田弘太郎役員らの他、協力の一端を担った資料委員会のメンバーとして筆者ら数人も招かれた。

翌 2018 年の年次晩餐会は、図書交換会の他、「チョゴリザ初登頂 60 周年」、「近代アルピニズムの幕開け」、「各支部の紹介ブース」等開催され、資料委員会展示として小島烏水ら発起人を中心とした草創期の写真と解説は壁面 10m に 12 枚の大型パネルを掲示し、資料映像委員が説明に当たった。四国支部も「小島烏水に関する展示」を掲示していた。その折に四国支部の森山事務局長や相良さんと会う機会があり(清水義浩前理事、柳田泰則会員の紹介による)、横浜山王山及び東京阿佐ヶ谷の烏水旧宅などに話題が及び、その後、阿佐ヶ谷の旧宅を烏水研究者のアーロン・ジャスニー氏らと訪ねる(2019.1)次第となった。アーロン氏は「山岳」114 年(2019)に「小島烏水　山岳文学の世界」を寄稿している。

因みに、私は阿佐ヶ谷の東に隣接した高円寺界隈で生まれ育ち近隣は懐かしい地である。

山岳会設立の頃〈20 世紀初頭の東京〉❻

富士見町にあった武田久吉邸

南川 金一

武田久吉邸跡は、現在は法政大学の一角になっている。武田久吉は「牛込見付内の邸に呱々の声をあげたが、…間もなく現在の旧旗本屋敷に移って…、旧市内では珍しい百年近くも経った、古い建物に住みついて…」(『明治の山旅』)、1972 年、89 歳で死去するまでその家に住んでいた。

そこで思い出したのは、『山岳』第百一年（二〇〇六年）に載った杉本誠氏の武田邸訪問の記である。同号は、百年史の編纂が大詰めでそちらに時間と精力を使い、『山岳』の企画にまでは知恵が及ばない中での編集で、山岳会の百年らしい企画として考えたのが、杉本氏ならば取材ノートを残しているであろうし、写真もあるだろうからと、私が執筆を依頼したものだった。杉本氏は「長老と共にある日々」として高野鷹蔵・武田久吉・冠松次郎宅を訪問取材した思い出を書いてくれた。

その中に、高野鷹蔵の話として「山岳第一号の編集会議は、武田君の家で行った」とあるのは誰も書いていない話で、当然小島烏水も武田邸を訪ねたはずだが、烏水も書いていない。そして杉本氏の武田邸訪問は「夜、すでに暗くなってから靖国神社の境内を横切って、富士見町のお宅の玄関に立った。その日の昼ごろ、『岳人』編集部に電話があり、『これを書いたのは君か、ずいぶん初歩的なことを知らないんだね』によっての訪問だから、叱られる覚悟はできていた。…六畳ほどの書斎に通される。書棚からあふれた本が床の上を占める中で椅子に掛けて待つ間も気が気ではない」。

その武田邸はすでにない。西春彦元駐英国大使がその経緯を書いている。「(富士見町の博士邸は)かつて東京都は記念保存物にしたい希望がありましたが、博士は記念物に指定されると来訪者が多く面倒だからと辞退したということでした。ところが今度、相続税関係などで同邸は隣接する法政大学に売り渡され、遺族は転居されたそうです。私はアーネスト・サトウの研究家萩原延寿君と相談し、同君から法政大学の中村総長に対し、この歴史的由緒ある博士邸を何とか保存して欲しいと申し入れ、総長も趣旨は十分了解し、篤と考慮を約されましたが、…」(会報 No.375、1976 年 9 月)。直接かかわった本人の話であり、貴重な証言である。武田邸の保存は叶わなかったわけであるが、法政大学では、背後の武田邸があったあたりの塀に碑板をはめ込んで記念としている。

前掲の西春彦氏の手記によると、武田久吉は英国大使館との接点はなく、大使館も元公使アーネスト・サトウの子息が武田久吉であるとは知らず、両者の間に何の交渉もなかったので、西氏がその仲介の労をとったという。本国からレディー・スコットという女性の植物学者が夫君と来日した折に、ピルチャー大使が武田久吉と西氏を昼食会に招き、大使と武田久吉の対面が実現するとともに、スコット氏も高山植物のある武田邸の庭を見たいとの希望で武田邸を訪問した。武田久吉も大いに喜んで庭を案内したというエピソードを西氏は紹介している。若き日の英国留学時の思い出や植物研究で、さぞかし熱のこもった会話が交わされたことであろう。

本紙 No.184（2023 年 2 月）の本稿❶を見て、平野紀子さんが武田邸や武田家についての思い出を寄せてくれた。「武田先生が亡くなった時は、(義父の）長英が手を握ってました（数日前より上京していて)」。武田久吉の最期については、会報 NO.325（1972 年 8 月）に藤島敏男が「武田久吉博士のことども」と題して、「五月二十一日、九段坂近くへ所用あって出向いた折、ふと思い立って武田博士のお宅を訪れた。あいにく留守、…」「それから五、六日たって、博士が私の往訪の翌日、外出支度の最中、室内で倒れられ半身麻痺、脳血栓らしいとの報が伝えられた」「六月一日お宅にほど近い逓信病院に入院、…七日夜九時十八分、武田博士は九十年の長い生涯を閉じられた」（筆者註、満年齢では 89 歳）と書いている。

＋ ＋ ＋ ＋ ＋ ◆ ＋ ＋《ようこそ、ルームへ》＋ ＋ ◆ ＋ ＋ ＋ ＋ ＋ ＋

山歩きが好きだった棟方志功　　松本 恒廣

棟方志功生誕 120 年展が東京国立近代美術館で 10 月 6 日から 12 月 3 日まで開催されている。

彼が日本山岳会会員であったことをご存知ですか。立山へは 3 回も登頂した山好きだった彼は、1945（昭和 20）年、青森から疎開してきて一時落ち着いた富山で JAC に入会した。

富山支部会員として会員番号 2317。東京へ行く 1951(昭和 26)年まで、会員として在籍したようである。この頃、JAC 事務所も戦災に遭い、当時の記録が消失し不明な点が多々ある。

富山支部会報の表紙は彼の版画である。棟方志功の作品のなかで山に係わるものでは、富山県福光美術館「立山連峰を望む海岸風景」を挙げる者が多い。文化勲章はじめ数々の栄誉に輝く版画家にも山好きの一面があったことを知っておいて欲しい。

なお、棟方志功については五十嶋一晃会員の「日本山岳会会員・棟方志功と立山」(「山岳」2012 年 Vol.107）に詳しい。

終戦前後の東京そして昭和後半の津軽　　小原 茂延

緑爽会報 No187 号に松本元代表の寄稿された『終戦を迎えて』の内容には小生の記憶と重なるところがあった。先ず東京の大空襲、3 月 10 日は下町の大空襲、次いで 5 月 24、5 日の山の手空襲であり、松本さんの世田谷のお宅は焼けずにすんだようですが、私が住んでいた中野の家は焼けて当時 2 歳半だった私は母の背で「僕の家燃えちゃったのね」と言っていたと後年聞かされた。

松本さんが伊豆に次いで学童疎開されたのが青森県西津軽郡木造町と知り、時代は異なるものの、弘前に約 5 年過ごした私も朝な夕なに秀麗な岩木山を見て過ごした。木造町(当時)も近辺だったのでドライブの途次に立ち寄った記憶がある。「弥三郎節」という民謡があって、「木造新田のしもあいの村のはんづれこ(端の意)の弥三郎えー」の一節を覚えている。

仕事は大鰐町の虹貝川上流にダムを建設していたのだが、「シーハイルの歌」に出てくる歌詞「岩木の颪(おろし)が吹くなら吹けよ…、昨日は梵珠嶺(ぼんじゅね)今日また阿闍羅(あじゃら)…」にある大鰐町のスキー場があった阿闍羅山の麓であった。

～～《予告など》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

11 月講演会

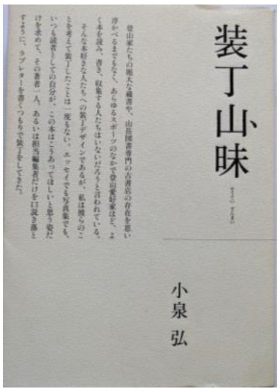
日時：11 月 18 日（土）　14 時～16 時

場所：ルーム　104 号室（当日はアルピニズムクラブの会合の日ですが、神崎代表に緑爽会の講演会で使用することを快諾いただきました）

講師：ブックデザイナー、JAC 会員小泉弘氏

演題：「長年山岳書の装丁を手掛けて・・本の想い出とエピソード」

※小泉弘会員は 2012 年に著書『装丁三昧』でその年の秩父宮記念山岳賞を受賞されています。また同年、図書委員会主催の「山岳図書を語る夕べ」でお話をされています。(「山」811 号参照)



申込：荒井正人まで電話かメールで（8 ページに番号など記載しています）

※当日は JR 東日本の山手線外回り（大崎～池袋間）が終日運休となりますので、市ヶ谷へ来られる時に関係する方は、ご注意願います。

※講演会終了後、講師を囲んで懇親の時間を設けたいと考えています。ついては申込時に、懇親会参加の意向もお教えいただきたく思います。

11 月山行　恒例となった奥多摩ハイキング

奥多摩の紅葉が美しい時期、昨年に引き続き石井会員に JR 古里駅から奥多摩駅間の多摩川沿いハイキングを案内いただきます。行程約 8.5 ㎞のコースですが、歴史の街歩き、森林や渓谷等の自然に浸る歩き、ダム魚道の見学など、バラエティーに富んだ内容です。

実施日：11 月 24 日（金）雨天時は中止

集　合：JR 青梅線古里駅前広場　9 時 15 分

行　程：古里駅前→（大多摩ウォーキングトレイル街の道）→寸庭橋（多摩川筏作り等歴史道）→松ノ木尾根展望台（山の道）→雲仙橋→鳩ノ巣小橋→（鳩ノ巣渓谷の道）→東屋（11:40 着･昼食予定）→白丸ダム→白丸ダム魚道見学→（ダム湖畔の道）→数馬峡橋→数馬峡遊歩道（紅葉の道）→発電所→（車道歩き）→奥多摩ビジターセンタ→奥多摩駅（→15:00 着予定）　　歩程約 5 時間 30 分

持ち物：（日帰り一般装備）昼食、飲料水、行動食、雨具、ストック、敷き物、携帯電話、マスク、健康保健証（写）、など

申　込：石井　秀典
石塚　嘉一
参加申込み〆切り 11 月 18 日（土）

12 月忘年会

日時：12 月 16 日（土）　12 時～14 時半

場所：中華「西安」市ヶ谷店（電話：03－5275－5220）

会費：3000 円

申込：荒井　正人
鳥橋　祥子

※毎度の店で恐縮ですが、ご容赦願います。なお、ルームの開室時間や使用条件が変わりましたが室内改装も終わって綺麗になりましたので、この機会にルームを訪ねてはいかがでしょうか。

1 月新年山行　新宿山ノ手七福神めぐり・・日程だけ早めにお知らせします

新年山行として小林さんに七福神めぐりを案内していただきます。

実施日：2024 年 1 月 11 日（木）

集　合：東京メトロ「新宿御苑前駅」改札口　午前 10 時

※10 月 16 日に「同好会連絡会議」が開かれました。そこで配付された資料から、「事務局からのお願い」を参考までに同封していますので、お読みいただきたく思います。

--- **編集後記** ----------

夏原さんからいただいたメールに「夏は昨日までです。今日からは秋です」との表現がありましたが、「今日からは冬です」のような急変です。朝日岳の遭難も防げなかったのかなと思います。そんな気候で、講演会、奥多摩山行の頃は寒いかもしれません。体調にはくれぐれもお気をつけください。（荒井正人）

朝夕がようやく寒くなっても、自然観察会の下見に出かけた里山の木々はまだ青々としていました。ただし、1ヵ月後の 11 月山行では奥多摩の錦秋を楽しめるはずです。ご参加をお待ちしています。（小林敏博）

＜次号予告＞12 月 25 日発行の主な内容

講演会報告、奥多摩ハイキング報告、南川さん連載❼など　皆さまからの投稿をお待ちしています